

第1回明石市観光振興基本構想審議会 議事要旨

日時：2026年7月29日（水）14時30分～16時30分

場所：明石市役所 議会棟 大会議室

1 開会

2 市長あいさつ（趣旨説明）

「明石市観光振興基本構想」の改定に向けて、有識者や地元関係の皆様、市民公募の皆様は審議会委員として参画いただけることに感謝している。

現在、明石市は13年連続の人口増となり、まちとしても明るさや勢いを感じられている。この先さらに生き活きとした都市にしていくために、「これからの明石の観光」の方向性や進むべき道を打ち出していくことが必要であると考えている。

明石市観光振興基本構想は平成22年に策定しており、時代の変化を踏まえ、15年ぶりに改定することとなった。

私が思う「これからの明石の観光」の一つ目は、従来のイメージどおり、観光振興により交流人口を拡大させることで地域経済への貢献を目指すもの。

もう一つの観光の概念は、市民のみなさんひとりひとりも地元の観光をしっかりと楽しんでいる姿を作っていくということ。市民のみなさんが地元や地域のことを知り、明石の誇りや愛着をもってもらう、まさにシビックプライドを育てるということにも繋がればというふうに考えている。

そういった「外からの観光」と「市民の観光」という「これからの観光」により、明石を活性化させ、最終的には持続可能な都市にしていきたい。

現在取り組んでいる「大蔵海岸みらいプロジェクト」について、昨年設置した大蔵海岸みらいプロジェクトアドバイザリーボードでは、大蔵海岸についてだけでなく、明石の観光全体の有益なご意見もいただいた。

一点目は、明石のコアバリューを整理すべきということ。

二点目は、中心市街地から、東外港、大蔵海岸にのびる東側のラインをL字というふうに捉え、L字のまちづくりや観光を考えるべきということ。

三点目は、外からの観光だけでなく、市民も楽しむ観光を考えるべきということ。いずれも大切なポイントであるので、今回の基本構想にもしっかり反映させたい。

また、この大蔵海岸みらいプロジェクトで実現させることができたものとしては、朝日夕陽百選に認定をしていただいたということ。こういったことも受けながら未来に向けて進んでいこうとしている。

市場調査では、食のイメージは強い一方、観光目的地としての認識は十分でないことが分かっており、明石固有の価値を整理し、観光地としての魅力向上につなげたい。

今後、審議会に加え、観光関係者によるワーキンググループや市民との対話の場、タウンミーティングなどを通じて、明石にかかわるみなさんで考え、幅広く意見を集めたい。

これからの明石の進むべき道を一緒に作りあげていくことを私自身もすごく楽しみにしており、大いに期待をしている。

実行力のある観光振興基本構想を作るため、それぞれの視点から、ぜひ色んなご意見、忌憚のないご提案をいただきたい。

3 委員及び事務局紹介

(委員自己紹介)

(事務局紹介)

4 会長の選出

会長に新川委員を、副会長に波瀾委員を選出した。

5 事務局からの説明

(事務局)

これからの明石の現状と課題について、資料 4.5 を説明。

説明に対する意見

(A 委員)

明石駅の乗車人員は、パピオスあかしができたときからかなり右肩上がりが増加し、2019 年までは増加基調だったが、コロナで減少。2025 年度にはかなり回復した。

一方、コロナ前の 2019 年と比較すると、定期が 91%、定期外が 86%で、定期よりも、観光客が主に利用する定期外の回復がかなり下回っている。

インバウンド（国全体）は、コロナ前の約 3,100 万人から現在は約 4,000 万人と右肩上がりが増加している。

関西では、京都、大阪に行った後、どこに行かれているかというところが課題であり、広島や博多など、山陽新幹線を使って西の方に行っていただくことを考えている。

神戸空港の国際化により、今後、外国人の方々がこの辺りに来られる機会も増えてくると思うので、三宮と姫路の間で、まず明石にも来ていただけるようにしたい。

魚の棚について、大阪の黒門市場や京都の錦市場と同じように、外国人の方々に人気となる素材が揃っているため、認知を上げながら来ていただく仕掛けができるのではないかな。

一方で、外国人だけにターゲットを絞ると、国内の方々とのすみ分けやオーバーツーリズムなどの課題もあるため、神戸空港の国際化の動きも踏まえ、今後どうしていくか

をしっかりと見ていきたい。

(B 委員)

神戸市の須磨浦山上遊園が非常に好調で、2025 年度の収入ベースで前年比約 170%となっている。好調の要因として、来園者の割合が外国人 8 割、国内 2 割となっている。

外国人観光客に話を聞くと、神戸空港から須磨浦ロープウェイに来たあと、京都や大阪に向かう人が多く、西に向かう人はほとんどいない。

姫路でも、インバウンドが宿泊せず、姫路城だけを見て通過してしまうことが課題となっており、いかに足を運んでいただき、長く滞在していただくかが大きな課題と聞いている。

コロナ前には、台湾や韓国などのインバウンドを誘致する「ファムトリップ」を積極的に実施していた。その中で明石を案内した際、魚の棚が一番好評だった。また、明石浦漁協のせりについても、「すごく楽しかった」という声があった。

須磨浦ロープウェイについても、外国人観光客が注目するきっかけとなったのは、見知らぬ人がInstagramに投稿したことであり、日本でここにしかない「カーレーター」などが注目された。

こうした事例からも、SNS を含め、明石の魅力をどのように PR していくかが非常に重要であり、今後検討していきたい点である。

(C 委員)

10 年後の基本構想を考える上で、高齢化や障害のある方の増加を見据え、誰もが安心・安全に訪れることができる観光地づくりを考える必要がある。10 年後の明石の人口や平均年齢、障害のある方の人数なども見据えながら、大蔵海岸をはじめとする観光・活動の場を整えていくことが重要。

安心・安全なまちは人にやさしいまちづくりにつながり、観光客が訪れるための基本的な条件になる。

インバウンドを含め、旅行の仕方が変化しており、旅行会社を通さず、SNS で現地の情報を調べ、航空券や宿泊、レンタカーなどを自分で手配する旅行者が増えていることを踏まえて考える必要がある。

インバウンドを呼び込むことは重要だが、地域の文化や歴史をきちんと守ることも重要。観光客にあわせて地域の文化を失ってしまうと、インバウンドが去った後に何も残らないという懸念がある。

明石においても、かつて錦江橋周辺にあった古い街並みや遊郭など、地域の歴史・文化を感じられる景観が失われている。残していれば、金沢のひがし茶屋街のように多くの人が訪れていた可能性もある。

「人が来る・儲かる」ということだけでなく、5 年後 10 年後に明石の文化や歴史をど

のように残していくのかという視点を基本構想に盛り込む必要がある。

6 各委員より情報提供

(1) セとうち DM0 での事例（吉原委員）

セとうち DM0 は、一般社団法人セとうち観光推進機構と株式会社瀬戸内ブランドコーポレーションの2法人で構成され、瀬戸内7県を活動範囲としている。

セとうち観光推進機構は、欧米豪をターゲットに、瀬戸内のブランディングや誘客のためのマーケティング・プロモーションを実施。一方、瀬戸内ブランドコーポレーションは、観光事業者の経営支援、プロダクト開発支援、資金調達の投融資等を行っている。

観光においては、プロモーションによる誘客と、来訪者の満足度を高める観光地づくりを両輪で進めることが必要。

自治体の観光計画の策定や地域ブランディング、DM0 の設立・運営支援のほか、宿泊施設や観光施設の開発・運営、観光事業への投資などにも取り組んでいる。

観光やまちづくりを進める上で、地域にある多くの魅力の中から「何を大切にするのか」という地域らしさ、コアバリューを決めることが重要。

「明石ってどんなまち？」と聞かれたときに一言で答えられるような地域らしさがあることで、観光やまちづくりを進める際の共通の目線になる。コアバリューは、その後のまちづくりの方向性を決める物差しにもなる。

セとうち DM0 では、「クルーズ」「サイクリング」「アート」「食」「宿」「地域産品」の6つを瀬戸内の魅力として整理し、活動の指針としている。

徳島県美馬市の事例では、地域資源を掘り下げ、歴史や自然とのつながりを整理することで、「吉野川水流がつむぐアート&クラフト」「自然循環との共生」「伝統と革新への美意識」という3つのコアバリューに整理し、外向けには「自然美・健康美・伝統美にこだわるまち」として発信している。

広島県尾道市瀬戸田エリアの事例では、地域のコアバリューをもとに、観光案内所、旅館、サイクリング船、グランピング施設などへの民間投資を約5年間集中的に行い、観光客の増加、民間投資の呼び込み、若い人の移住や雇用の創出につながっている。

今回の観光振興基本構想は、「明石らしさを未来につないでいく計画」であり、その元になる共通の考え方として、コアバリューをしっかりと探していくことが重要。

(2) コアバリューの重要性について（波瀲副会長）

観光振興計画の策定において、振興の核となる価値、つまりコアバリューの重要性、価値の整理から見出し、言語化するプロセスについて、他地域の事例とともに少しお話をさせていただく。

コアバリューとは、企業経営において、組織が行動や意思決定の基準として共有すべき中核となる価値観、あるいは、日々の業務や意思決定などの判断や物差しとなるもの

といわれている。外部に向けた公的な宣言や根本的な考え方を示す「企業理念」と、コアバリューは若干違う。コアバリューの特徴は、不変性であること、少数の精選されたものであること、共通の言語化であることが言える。

観光振興で近年使われるコアバリューとは、その地域が「絶対に譲れない、時代が変わっても守り続ける独自の魅力や信念」といえる。言語化、共有化により、地域全体の価値を損なうような事業を防ぎ、強力な推進力を持った地域経営が可能となる。具体的には、「地域の生活や景観を守り、オーバーツーリズムの防壁になる」、「住民が誇りに思う価値観を軸にすることで、地域全体で観光客を歓迎する土壌となる」、そして「根底にあるブレない世界観でファンの獲得が期待できる」といえる。

観光のコアバリューの源泉は、「地域の文化」、「自然」、「暮らし」、「日常」、「人との関係性」にある。例えば、新潟県 2025 年からの観光振興計画で初めて、地域にあるさまざまな魅力の一つにつなぐストーリーとして「大地と雪の恩恵」を設定した。同県は広く、まとまりにくいという課題がある。

明石市は、海峡のまち、食のまち、時のまちというふうに魅力がバラバラに見えることもある。これの一つに繋げてナラティブなストーリーを作ることが大切だと思う。

コアバリューを見いだすには、「地域にあるもの（価値のファクト）」「地域で営まれていること（住まう価値）」「外から見た魅力（訪れる価値）」の 3 つの視点を重ね合わせ、地域の思いと来訪者の期待が重なる部分を言語化することが重要である。見出す人は、価値のファクトは専門家、住まう価値は事業者アンケートやワークショップ、訪れる価値は外部専門家というように一部ではなく、広く対話を重ねるプロセスが大切である。コアバリューを維持し活用する仕組みの例として、雪国観光圏という DM0 では、地形や地質、歴史の専門家も関わり本質的な価値を守りつつ、観光振興でコアバリューを共通言語として内外に伝え、付加価値を創り出す体制をとっている。

その結果、来訪者との相互理解が深まることで、旅行者が来るから生活に支障をきたすと考えるのではなく、来てくれてありがとうという温かい関係性になることが、心理的な壁を乗り越える鍵になると思う。

明石においても、外からの観光客を増やすだけでなく、市民自身が明石の魅力を知り、地元を観光することも重要であり、1 つ 1 つの地域資源は小規模でも、コアなファンが何度も訪れて楽しめるまちを目指していくことが大切。 そのためには明石らしさをしっかり守りながら、住民と旅行者の良い関係を育てていくことが重要である。

市長が言われたように、観光は、従来のように交流人口を増やすことに加えて、市民にも地元の観光を楽しんでもらうという 2 点が大事。

そんなに壮大なことを言っているわけではないということをみなさんにご理解いただきたい。

(3) 明石市の歴史や成り立ちなど（奥村委員）

時間が限られているため、明石の歴史的な特質について、特に重要な点を抜き出して説明したい。

まず、明石は広大な段丘面の上に位置し、標高も最高で約 90 メートルと高低差が少ないという、特徴的な自然地形を持っている。その一方で、ため池が多く、これらが地域の自然の多様性を支えている。また、段丘面の海側には砂嘴が発達し、古代以来、明石や魚住の港として利用されてきた。さらに、明石海峡とそこから展開された漁業も、明石の大きな特質である。

また、国家的な交通軸は古代以来、東西方向に形成されてきた一方、生活や生産の空間は南北方向にも広がっていた。中世の明石郡には一体性の強い生活・生産圏が形成され、現在の神戸市域にある太山寺なども、もともとは明石郡の重要な文化・宗教的拠点であった。

明石藩が成立し、明石城は現在の明石市域を越えて東播磨を覆うように、広く支配していた。明石城も、単に明石のまちのための城ではなく、瀬戸内海の海上交通の監視や戦国大名に対する威圧などを背景に築かれたものであり、明石の文化的遺産を考える上でも重要である。藩の大きさに比べて、お城が極めて大きいというのが、その特色である。

また、明石焼などの陶器や酒造業など、地域の産業も発展していった。近代になると、明石町では土族・町人・漁民が関わり合いながら独自の文化が形成された。大正期には県下 4 番目の市となり、その後、川崎航空機の工場など工業地帯も形成された。

一方、空襲によって多くの景観が失われたことも、現在の明石の特徴につながっている。

昭和 26 年には大久保、魚住、加古郡の二見などを含めて現在の明石市域が形成されたが、それぞれの地域には独自の歴史や景観がある。特に二見は、明石藩領ではなかったこともあり、現在も独自の景観や文化を残している。

このように、現在の明石市は海岸部を中心とした市域であるが、その成り立ちを考えると、東播磨や旧明石郡を含めた広い生活・生産・文化圏との関係の中で形成されてきた。現在は生活上のつながりが以前より薄れている部分もあるが、祭りなどの文化的なつながりは残っている。

こうした歴史的な広がりや地域間の関係性も、明石の観光を考える上で重要ではないか。

7 意見交換

(D 委員)

商工会議所として、長年、地域に関わる中で、明石の風情や雰囲気が大きく変化してきたことを実感している。一方、市外の人からは「明石にはいろいろなものがあってよ

い」と評価されることが多く、実際に地域には多様な魅力や資源が存在している。

しかし、それらがバラバラで、まとまりが十分ではないことが課題であると感じている。明石が持つさまざまな魅力を、どのようにつなぎ合わせ、地域全体として発信・活用していくかが重要であると考えている。

また、明石には地域性として保守的な側面があり、10 年ほど前までは「観光客やインバウンドを呼び込む必要はない」という意識も強かった。

一方、明石海峡大橋の開通により、淡路島への人の流れが大きく変化した。以前は淡路島から航路でたくさんの人が訪れていたうえに、三木方面からも明石へ来る人が多かった。

文化圏については、東播磨県民局の管轄として明石市、加古川市、高砂市、播磨町、稲美町が一つのくくりとなっているが、経済、文化的には明石は東側、神戸方面とのつながりが強い。一方、加古川市・高砂市、播磨町・稲美町は2市2町でまとまりがあるように感じている。

魚の棚についても近年変化が見られる。従来は「鮮度の良い魚は切って販売するものではない」といった昔ながらの商売のスタイルが続いてきたが、時代の変化や魚の減少などにより、従来の形を維持することが難しくなっている。

明石には、このように歴史的・文化的な背景を持つさまざまな地域資源や課題が存在しており、それらが現在の明石のまちの姿にもつながっている。長く地域に関わってきた立場から、こうした変化を実感している。

(E 委員)

NP0 法人活動では、市民広場を活用した大規模なイベントも実施しており、そこには、関東や岡山、福岡などからの参加もある。

活動を通じて、参加者から見た明石の魅力を知る機会も多く、また、自身が視覚障害者の立場から明石の観光地を実際に利用し、その場所を活用した活動も行っている。こうした経験や視点を生かしていきたい。

(F 委員)

インバウンドや地元住民など対象者がバラバラで、誰に向けて観光を考えていくのかを明確にする必要があると感じた。

新潟の事例で出た「ストーリー」は、まずその場所に行き、興味を持った上でストーリーに関心を持つものではないか。ストーリーに興味を持つまでのきっかけづくりを、まず考える必要がある。

若者が SNS、特にインスタグラムで観光情報を調べる背景には、文字を読むよりも視覚的に情報を得たいという傾向がある。

若者をターゲットにするのであれば、「見たときに行きたいと思える」ような、可視

化を重視した情報発信が必要。

10 年後には現在の若者が大人や家族連れになっていることを考えると、現在の若者の行動や嗜好を踏まえた観光施策を考えることが重要。

(G 委員)

錦市場や黒門市場のような観光地化について、住民としては明石には同じようになってほしくないと感じた。

コアバリューの設定について、新潟の事例のように、時間をかけて住民・企業・行政などで対話しながら考えていくことが重要。プロセスをないがしろにすると、明石らしくない方向に進んでしまう可能性があると感じた。

明石川流域を考える上では、太山寺や西区とのつながりも含めて考える必要がある。

「明石の魚は切って販売しない」という従来の商売のあり方も、変えるのではなく、明石らしさとして価値にしていく考え方があってもよい。

観光に迎合するのではなく、明石がこれまで何を守ってきたのかを掘り下げることが、コアバリューにつながるのではないかと。

ありきたりな観光ではなく、「明石の本質は何なのか」を今回の会議で見いだしていきたい。

本日の議論をワーキンググループにも共有してほしい。

(新川会長)

本日は、明石の観光基本構想に向けての最初のステップとして、明石が抱えている歴史・文化、さまざまな遺産も含めて情報を共有し、コアバリューと観光、まちづくりについて考えるための基礎となる知識を共有したところかと思う。

この内容をこれからどういうふうに具体的な明石の観光に向けてのコアバリューとして作り上げていくのか、そしてそれがどういうふうな展望・展開を可能にしていくのかについて、今日の議論をワーキンググループの皆さん方にもしっかりとお伝えし、コアバリューや明石の観光まちづくりの方向性、そのための具体的な方策についても、議論をしていただきたい。その議論の内容を各委員にフィードバックしながら、次回の審議会での議論を進めていきたいと考えている。あわせて、今日の議論について、言い足りないことや、ぜひ皆さんと共有したいことがあれば事務局に意見等を寄せていただきたい。

(市長)

限られた時間の中で、本当にありがとうございます。

波瀾副会長、吉原委員のお話から、今後のタウンミーティングやワーキンググループの中で、地域のコアバリューをしっかりと見つけ出していくためにはどうすべきかという

ご示唆をいただいた。タウンミーティングでは、特に「住まう価値」をしっかり押さえて、出していただけるような形にしたい。

タウンミーティングについては、都合がよければぜひ参加いただき、今日まだまだ発言いただけていない思いも含めて、市民の輪に入っているんなご意見をいただけるとありがたい。

奥村委員には、ダイジェストではあるが、明石の歴史をよく学ばせていただいた。若者の視点というのも大事なので、時間をかけてコアバリューを見つけ出していくことが必要であれば、回数を増やすこともやぶさかではない。

今後もよろしくお願いします。